

開業30年～ いろいろな患者様

函館市医師会
保浦内科医院

やすうら しんいち
保浦 眞一

まもなく古希を迎える爺医です。それまで勤務していた総合病院を辞め、父が開業している診療所で父と一緒に診療するようになって、もうすぐ30年となります。その間の忘れられないエピソードを幾つか記します。

私は高校卒業まで自宅兼用の今の診療所に住んでおり、隣に従業員宿舎がありましたので、子供の頃から従業員とは家族同様に生活してました。そんな訳で開業当時のスタッフの中には私を知っている人も何人かおりました。私がカルテを事務員に渡すと、「お兄ちゃん、この字何て読むの？」と患者の前で言われ、たいそう恥ずかしい思いをしました。その事務員は今も当院に勤務しております。さすがに今は「先生」と呼んでくれます。

いろいろな患者と出会いました。待合室の会話が聞こえてきます。「〇〇さん、珍しく今日来てないね」「病気なんじゃないの」開業初期の頃の待合室はバアサンたちのサロンと化していました。

最近まで夜間、休日も電話対応をやっておりました（さすがに今は体力が持たず、時間外の対応は在宅と施設だけです）。夜、散々飲んでふらふらになっていた時、自宅の「ピンポン」が鳴りインターフォンに出ると、しばしば夜間（時間外）に来院する飲み屋のオネエちゃん。「先生、酔っ払って眩暈するから注射して」と。こっちは御同様だったのですが、診察室に入れ、ブルブル震える手でメイロンか何かを何度も刺し直し静注しました。今なら訴えられたら間違いなく負けますね。オネエちゃんは怒りもせず「先生またね」とフラフラ帰っていきました。

深夜寝ているとき、近所に住む不安症の婆さんから電話。「眠れないから往診して」と。「人を起こしておいてテメエが寝るつもりか！」と言いたかったけど、気が弱い私は寝惚けまなこで歩いて往診し、セルシン打ってあげました。帰ってからこちらが眠れませんでした。

日中の診療でもこんなことがありました。インフルエンザが流行っているとき、テスト陽性の若い女性。「熱ある時はお風呂我慢してね」と言うと、「それは困る。仕事ができない」「え？」ソーブランドにお勤めの方でした。

今度は怖い話。肝硬変で診ていた元校長先生に肝癌が見つかり、総合病院に紹介し入院となりました。後日見舞いに行ったとき、元校長先生が私に「お世話になりありがとうございます。これから何かあつ

ても先生は訴えないと決めました」と。ゾ～としました。何かあったら訴える気だったのかよ。

中には失礼な患者様も。かなり遠方からいらした初診の患者。わざわざ当院にいらした訳を尋ねると、「近くの診療所、いつも混んでてこちらで診てもらったほうが早いから」。なんと無礼なんでしょう。

私の大失敗もありました。お中元の季節でしたでしょうか。患者から「これ先生に」と白い封筒を渡されました。私は「いえいえ、これは受け取れません」と、まずは丁重にお断りいたしました。すると先方は私の勘違いに気付き、急にバツが悪そうに「保険の証明書を書いてください」と。わが人生最大の恥辱の一つです。

まだまだ30年も開業医をやっていると、いろいろなことがありました。以上は笑いを取る為の作り話ではありません。全て実話です。「ある、ある」でしょう、御同輩。

